

山 静 似 太 古

富 田 惣 七 *

まいどし、おなじことを書きますが、しかしひとつことを繰り返しますのは、そのことがよくよく気になって、これは大変なことだ — というものが私の中で音でもたてているような、そんな気持ちがするからであります。

★ ★ ★

Natural という語の邦訳にはいろんな意味がありますが、われわれに直接関係したものといえば勿論 — 自然界に関する — という件（くだり）であります。

今ここで改めてこんな言葉をひきだしてきましたのは、今の人間の考えが — 自然 — とか — 自然界 — とかそういう言葉又はそういうことについて、余りにそれを客観視している様子がある、それが大変気になるからであります。

この事については、特に自然科学のそれぞれの分野で重要な研究をしておられる権威ある先生方もそのように言っていられますから、これはキット現代病とでも言うべきものかも知れません。

★ ★ ★

自分が自然というものの外に居て、そこから自然を眺めてでもいるような、そんな様子があるのです。つまり自分が自然の小さい一つの部分である、地上に生息している小さい一生物なのだ、ということを忘れている。そういうところがあるのです。特に近頃それがひどくなってきました。

例えば — 遺伝子の組み換え — というような方面へ急傾斜していく医学の分野などでは、その行きつく先は全くの闇雲で、どこへ向ってどう走るのやら、ただ脚にまかせて、まずそこまで、まずそこまで、というあんばいです。

研究という密室で、学問と技術の操作のカーテンに仕切られていますから、その中では自分を客観で把えることは困難なのでしょう。

ですからそこでは自然 — われわれがなすべき、又われわれがなしてよい行為の足場 — というものに対する思考が全く欠除しています。そしてそこにはもう人間が大気を吸って、与えられた生命のリズムの中で生きている空間がなくなっています。

★ ★ ★

総じてこんな傾向が急に人間社会の中でふくらんでいて、それが今や主流になっているようあります。

そこには訝やしい、稚妄とでも言うべき夢があって、人類の前途は洋々としていて、未知の世界が次から次へと開かれていく、驚嘆すべき先端の技術、不思議な世界の発見、解明 — それが壮大なドラマとして新らしく歴史に登場してくる — と夢中でよろこんでいる、という案梅であります。

* 福井市照手 1-2-9

そして21世紀はどんな夢が現実のものとなるだろうと、それをみんなが大変たのしみにしているようあります

★ ★ ★

ところが、どっこい、そうはいかないのであります。21世紀などはないのであります。

F A O（国連食糧農業機関）が、この春—世界林業会議—を開きました。

ここで討議された問題—世界中の森林の現状が示している戦慄すべき様相—それが非常な危機感の中で討議されました。

その一つ一つの具体的なことは専門外の私には分りませんが、それでもそこに示された数々の報告が、すべて例外なく人間の思いあがりと、目先の利益第一主義にその原因があるのを示している事は理解することができます。

★ ★ ★

急激に緑が地球上から消えていく、ということが地球上に生息しているすべてのものにとって何を意味するのか、どんなことを暗示しているのか。

今の人間にはしかし、そんなことより、こんど開設されたロボットがこうしてあゝして、という事の方に関心があります。人間が作った先端技術が大工場をロボットで動かしているという話題には引き込まれていきます。

そのとき、それを眼をかがやかせて聴いている人間の姿は、どうも何かに操作されているロボットにみえます。そしてその頭の中の軸心をはずれた格好も、何やらを想い出させます。

そんな人間に21世紀などあるわけがありません。

★ ★ ★

さて、ところで、驚いたことには、自然科学博物館では、その来館者を増やすために、駐車場をつくるよう当局に要求しなくてはなるまい、という意見が出たりするのですから、びっくりします。

自動車はどんな角度からどんな点から調べてみても、緑の有力な破壊者であることは明白であります。F A Oの研究に集約されたものに俟つまでもなく、自動車は酸性雨の有力な製作者メンバーであり、人体に発ガン性の物質を送りこむ強力な下手人であり、その他数々の罪科を背負っています。だが、自動車を売らねばならぬ人達の一派によって、われわれの排除の意識にのぼらないように匿われているのであります。

★ ★ ★

こんなものを山にあげるなんて、もってのほかだ、と現在の尾根ルートの閉鎖を求めるのならば話は分ります。とにかくこれではひどい話です。

博物学は人間のためにあるので、単なる抽象の論理としての学問そのもののためには在るのではありません。

今日本で良識の先頭に立って、立派な仕事をつづけておられる自然学者の先生たちは、その眼を人間の明日に向けて、そこに何があるか、そこで何が人間を待っているのかを、われわれに警告されているのであります。

その眼に導かれて、われわれの眼も、その明日の人間の姿をつかみとらねばなりません。